
老い、あるいは命

月島 真昼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

老い、あるいは命

【Nコード】

N6737L

【作者名】

月島 真昼

【あらすじ】

もうすぐ祖父が死ぬ。

僕と祖父（前書き）

短いです。なんていうかこれ以上書けませんでした。

僕と祖父

病室からは腐った水の臭いがした。

後ろ手に扉を閉めて二歩近づく。ベッドに横たわる祖父の姿は元の面影をほとんど残していなかった。

張りがなく皺の寄る手、

骨の浮き出た首元、

数秒置きのハー、……ハー、という醜い呼吸音、

白い目は半分競り上がっていてもう見えているのか怪しかった。年の割りには多かった髪は白く染まっている。

僕は叔母に祖父の顔を見るように言われてそちらの側に回った。

祖父が荒い息を吐く度に病人特有の嫌な息が鼻を突く。顔を背けたくなるのを堪えて僕は祖父を見下ろした。

この生き物はなんだろうか……？

幼いころの祖父は優しく力強く大きかった。よく将棋を指した。

僕はいつも勝てなかったけど一昨年に一度だけ勝ったのだったか。

僕が覚えたばかりの美濃囲いからの攻め手を披露すると長考しだした祖父はどこか嬉しそうだった。

何事も豪快に笑い飛ばすような性格で僕は畏怖と親しみを持って祖父を密かに尊敬していた。

だが目の前の祖父はもう何も持っていなかった。

老いとはなんだろう。

なぜ人はここまで醜く堕ちなければならぬのか。

母はこのところ看病で少し憂れていた。こんなことは母の体調に比べればどうでもいいのだが、弁当やファミリーレストランでの食事が増えた。

祖父は母には厳格だったと聞いている。こんな姿になってなお母を縛り付ける祖父に鈍い苛立ちを覚えた。

僕はもうしばらく祖父に会っていなかった。プライドの高い人だった祖父は病室に横たわる姿を見せたくなかったのだろうし、僕も高校3年も忙しい時期だった。

大学の入学式を終えたばかりの僕はまだスーツ姿で、久々に会う祖父にこれを一目見せたかった。

明日も僕は大学がある。果たして祖父は明日まで生きているのだろうか？

明日、大学にいる途中で祖父の訃報があればどうしようか？ 頭の隅で僕はそんなことを考えてしまう。

自分で思うよりも祖父を思い出せる量は遥かに少ない。それよりも病室の匂いが不快だ。病室に入って先ずそんなことを考えた自分が嫌になる。

僕は隣の母を横目に見た。

母は強い人だった。一番近くで祖父が衰えて行くのを見ていたはずなのに、泣き言に似たことはほとんど漏らさなかった。

その母が僕にだけ聞こえるような小さな声で一言だけ言った。

辛い、と。

不意に祖父の手が少し動いた気がした。気のせいだった。

もうすぐ祖父が死ぬなかで夕飯の調達を任されて母と僕は病室を出た。

僕はともかく母は臨終に立ち会わせてあげかったが母と母の姉は早朝から何も口にしていないらしく流石に限界だったようだ。

医師からも夜までは持つだろうというお墨付きを貰った。僕は死なんて予告できるものだと思わなかったのだが母が了承したので付き添った。

赤い光の差す車内で母は大学の話を聞きたがった。気を紛らわそうとしているのだとわかっていたので僕は少し陽気に言葉を紡ぐ。

まだ1人だが大学で友達が出来たことを話した。僕は内気で人見知りな性格なのを母は知っていたからそれを喜んだ。

高速道路に入ったとき不意にラブホテルのふざけた名前が目に入
って僕は言い様のない怒りを感じた。
八つ当たりだ、と自分で気づいていた。

僕と死際

母と僕が病室に戻ると僕の父と一つ歳上の従姉が来ていた。祖父の手を握り締めて作ったような無表情をしていた。退屈なのだろう。僕も同じだからよくわかる。

この空間は退屈だ。それは母と母の姉が時間が停まって欲しいと考えているからだだろう。だがわかっている。時間がゆっくり流れるならば祖父の苦しみは増すのだ。

そうして。

一人用の小さなベッドを五人の人間に囲まれて、

二本しかない手を十本の手にもまれて、

祖父は呼吸をやめた。

僕は本当に祖父は呼吸をやめただけだと思ったが一度まばたきしたあとに広がった光景は違っていた。

悪戯でする死んだふりのようなあっさり、

しかしたしかに祖父は死んでいた。

誰かが医師を呼んだ。母ではなかった。たしか母は額を僕の胸に押し付けていた。

従姉ではなかったと思う。従姉は無表情を崩さないままずっと祖父の手を離さなかった。丁度僕の真向かいに座っていたから従姉の様子はよく見えていた。

となるときつと父か母の姉かなと思いが当たるが、だからどうしたのだろうか？ 祖父の死亡を確認した時刻がいつだったかとか脈打つのを止めた祖父が正視できなかったなんてことは些細なことのはずだ。

僕には明日の大学をどうするかのほうが大事なはずだった。僕は

自分をそういう人間だと思っていた。

だけど心のどこかで決めていた。

大学は休もう。

入学したてで重要な説明会だかなんだかがあるはずだが知ったことではない。

ただなんとなくそう思った。

病院を出て祖父のいた家で少し腰を落ち着ける。スーツから普段着に着替える。

母達が慌ただしく動く中で僕と従姉は何か置き去りにされたような喪失感を抱えていた。余り物同士が引っ付くように僕と姉はどちらからともなく話始めた。歳が近いことも手伝ってかいくらかの時間を潰せるだけの話題はあった。ただどれも空虚だった。あとで振り返ってみれば僕はきつと従姉との会話のどれ一つとして覚えてはいないだろう。

ただ従姉の声は少し高かった。

きつと僕の声も少し高かった。

いくらかの話題がある、といつてもやはり限りがあり僕も従姉も話疲れてしまった。

僕は座布団を敷いて少しだけのつもりで眠った。夢は見なかった。見ていたら何の夢を見ていただろう。

祖父の夢？

従姉の夢？

大学の夢？

どれも違う気がする。電灯の明かりが瞼を浅く貫いて僕は目を覚ます。

僕と通夜

通夜が始まる。

母が振り返って礼をした。僕は席を立つ。パイプ椅子が少し軋む。履き慣れない革靴を二日連続で履いたせいで少し足が痛かった。

前が出る。

僕は振り返って一礼した。

頭を上げて映るのは左手側　入り口から見れば右手側　に親族の数十人（従姉と目があった）と右手側にズラリと並んだ弔問客だった。

焼香台と向き合い僕はあの中の何人かが祖父の死を悲しんでいるのかなと頭の隅で考える。

香を一摘まみする。線香のように小さな火の中に落とすと焼けていく匂いが乾いた目に染みて少し痛かった。もう一度礼をして席に戻る。配られたお経の文字だけを追う。

親族の焼香が終わって弔問客が立つ。通りすぎていく彼らに僕は事務的に頭を下げる。

彼らの目は愉快そうどこそないが、大した悲哀も込められていない。

僕もきつと彼らと大して変わらないだろう。

壇上に飾られた写真を見る。決して若々しくはないながらも照れたようにはにかむ写真の中の祖父は活力があった。十二時間前の祖父を写真のモノと重ねて頭を下げたままの僕の胸に何かがよぎった。それがどんなものかは僕にはわからなかった。

一時間もすれば人波は消えてなくなつて僕は顔も名前も覚えていない幾人かの親戚の「大きくなつたね」、「今年でいくつ?」という問いに答え続けた。

僕が今年で大学生になることを答えるとだいたいは「そう、もうそんな歳になるの」と顔を綻ばせた。皺の寄る頬はいくらか死に慣れていた。少なくとも僕や従姉よりは。

虚しい。

ここに何があるだろうか。僕や従姉が居る。祖父の血縁の人間が居る。しかし彼らの興味はどちらかと言えば祖父よりも僕や従姉の年齢や生活にある。祖父が喪われて行くのを僕は感じた。

強かった祖父が、優しかった祖父が、将棋の強かった祖父が、彼らの胸から去っていく。

それがたしかに感じられるようで僕は虚しかった。

通夜が終わる。

明日は葬儀がある。

それを終えればきつと祖父は僕にとっても過去になるだろう。

僕と葬儀

夜が明けるまでは長かったが、朝が訪れると葬儀は直ぐに始まった。

半分も聞こえない弔辞が過ぎて僕や従姉は花を手向ける。母の手が、父の手が、何度も何度も往復し細い祖父の体が飾られていく。なぜだか暗い棺の中で祖父のトレードマークの黄色いネクタイだけが妙に明るくて、それが花に隠れていくのが妙に切なくて。

蓋をされた棺が僕や父の手であっさりと持ち上がる。棺は軽かった。あんなにたくさん花を入れたのに、棺は軽かった。

すぐ隣の火葬場に運ばれて合掌のあとにくべられる火。一、二時間もすれば白くてキレイな木目に入った棺も手向けられた花も燃え尽きて、

木屑と黒い灰の混じった真っ白な乾いた祖父は、

親戚の伯父さんや伯母さんに木でできた箸でつつかれる度にカサカサと、時々パリンパリンと音を立てて、

その姿があまり脆くて

その姿があまり悲しくて

僕は泣いた。

ただただ泣いた。

僕はきつとこのことを一生忘れることはないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6737/>

老い、あるいは命

2010年10月8日14時51分発行